



二年前、俺は悲しそうにドームを去る彼の姿を見ていた。そして俺は彼のその後の事が気になり、会いに行くことにした。

二年前、毎日通っていた東山線の伏見駅に着き、そこから科学館へ向かう。科学館へはあの時から全く行っていない。

白川公園のすぐ横、いや白川公園内と言ってもいいであろう場所に、科学館はある。

真ん中の大きな球体が、ぶら下がるように二つの建物を繋いでいる。

その球体の部分に彼はいる。

俺は科学館の入り口に差し掛かり、大勢の人を縫うようにガラス張りの階段を、彼のいる五階まで昇っていく。

そして、球体への通路を渡り俺は彼の待つ部屋の中に入って行く。すると彼はあの時と変わらずそこに居た。彼は現役を退いて隠居の身となって随分立つが、やはりあのドームを去った時のような悲しそうな雰囲気は彼の周りに漂っていた。

今から二十七年前彼は生まれた。そして、その時から彼はこの場所で働いている。二十七年間、彼は常に夜空の番人だった。そして去年、若すぎる年齢ではあるが、現役を引退し別の生き方を強いられた。彼の半生を聞きたくて今日俺は彼に話しかけた。話し掛けられた彼は少し驚いたようではあったが、静かに語りだした。

私が最初に来た時の事は、あんまり覚えてないんです。なにせ生まれたばかりですからね。昔の記憶であるのは、働き出してから少しした後ぐらいからです。

その時私は、自分の事なんてよく解らずにただがむしゃらに働いていました。

もちろん自分の意志なんてものは何にもありませんでしたよ。

それが、ある日突然みんなの気持ちをはっきりと伝わってくるようになったんです。

何が切っ掛けでそうなったのか.....私にもはっきりとはわかりません。

でも、子供たちの喜びや驚き、興奮とか、そんなものが私の中に入り込んで来たんです。

その時は、どうしていいか解らずに泣き出してしまいそうになって、しばらくは働く事が出来そうにもありませんでした。

だって、そうでしょ？　今まで知りもしなかった人達に、いきなりむき出しの感情をぶつけられたら、誰だってそうなると思いませんか？

俺は彼の言葉に頷き、自分がそういう状態になった時の事を考えてみた。

突然街中でいきなり怒鳴られたり、好意を持たれたとしたらどうなるだろうと。

それが突然であればあるほど困惑するであろう。

特に今まで感情などあまり表に出さなかったなら尚更だ。

俺はそう思い、彼に話の続きを促した。

でも、しばらくすると解ったんです。

この感情は私に向けられているものではないという事がね。それからは楽しかったですよ。

彼等と共に喜んだり、興奮したり、本当に楽しい毎日でした。

そうするうちに私もいろんな知識がついて来て、いつも私が見ていた夜空にいつか行ってみたい、そう思うようになっていたんです。

子供たちの中にも、もちろんそういう子供たちもいましたしね。

そういう子供たちの影響が無かったかという、決してそんな事はありません。

むしろ子供たちが私にそういう知識や夢のようなものを教えてくれたんです。

だから私はこの仕事に就けたことがよかったって、本当にそう思っています。

彼は俺に、自分の夢を子供の様に語ってくれた。

しかし、俺は彼のそんな夢が、どうしてもかなわない事を知っていた。

なぜなら彼は、遠くを見渡せる眼は持っていた、夜空に向かって羽ばたく翼は持ち合わせていなかったからだ。

もう現役を退いた今でも変わってはいない。

それは解ってはいたが、俺は彼にその事実を言う事なんかできなかった。

彼の夢を壊したくはなかったから。

俺は、そう思う気持ちを彼に悟られないように、話の続きを聞いた。

確かに、私はもう現役を引退しました。でもね、私だってまだいろんな事がやれるって、そう思っているんです。

確かに、新人にはいろんな事で負けているかもしれませんが、でも私にはいろんな人達から受け継いだ知識があるんだから。

だから、まだまだ私は自分の見ている夢を諦める気なんてないですよ。

すいません、少し興奮してしまいましたね。

でも、やはり少し寂しくもあるんです。だって、今までずっと星を見上げて生きて来たんです、それが急に星の見えない所に連れてこられて.....

確かに、今まで以上に子供たちとの距離は近くなりましたし、色々な事に触れる機会は多くなりました。

でもやはり私には私の本来の仕事があると思っています。

だってそうでしょ？ 私には星を見る仕事しかなかったんです。でもそれが今はどうですか？ 部屋の中に押し込まれて窓さえもほとんどないし、拳銃の果てに空なんて見えやしない。確かに同僚の映し出す星はあるかもしれませんが、でもそんなものは本当の星空に比べればあくまで擬似的な物でしかないんです。

私は本当の星空を見たい、でも今はそれすら叶わない。

なぜなんです？ 新人が来たからですか？ それとも私はもう時代遅れのロートルなんですか？ 確かに二十七年も経てば今はもう敵わないかもしれませんが、それでも、それでも.....

俺は興奮した彼を少し落ち着かせる。

彼は今のこの立場に本当に憤りを感じているのだろう。そうでなければこんなにも取り乱したりはしないはずだ。

現役だった頃を懐かしみ、それゆえに今の状態が悲しく、そして虚しくも思えるのだろう。少し落ち着いた彼はまた話し始めた。

取り乱してしまってすいません。

でも、私はそれだけこの仕事に真剣に取り組んでいたんです。

確かに、今のこの仕事も、これはこれで大事な仕事だという事は解っています。もしかしたら将来私のような星を眺める仕事に就くものを育てる人達がこの中から出て来るかもしれません。

だからこの仕事も決して無駄な事ではない事は、充分理解しているつもりです。

でも、もう一度……もう一度だけで良いから、星空を子供たちと一緒に見てみたかったな……本当にすみません。わざわざ私を訪ねて来て頂いたのに、こんな話をしてしまって。

彼のその言葉に、俺は曖昧な返事で答えた。

俺は、彼のその気持ちをしっかりと理解できるかどうかは自分でも解らない、しかし彼が本気で星を見る仕事が好きで、長年それに情熱を傾けていたことは事実だろう。

少なくとも彼のその気持ちだけは理解できた。

だから彼の今の現状に、少しは同情を禁じ得なくはある。しかし、彼も言うように今の彼の仕事も決して無駄なものではない。

彼は自分を曝け出す事で、彼の下に来た人達に彼や彼の仲間達の事を理解して貰う為の広告塔の様な存在になっているのだ。

今の彼の現状に同情はする。だが彼の今の仕事も立派なものだと俺は思う、だから今まで以上に彼には今の仕事を頑張って貰いたいと、俺は彼にその事を告げた。

俺の言葉に、彼は静かに頷き私に感謝の言葉を告げた。

ありがとうございます。

あなたが今日ここに来てくれた事、本当に感謝します。

もしあなたが今日来てくれていなかったら、もしかすると私は心を閉ざしてしまって、もう二度と誰の呼びかけにも答えなくなっていたかもしれません。

あなたの言われる通りですね。自分でも解っていますが、昔の事を思い出して少し感情的になってしまったのでしょうかね。

本当に、お見苦しい所をお見せしました。

これからは少し考え方を変えて、この仕事に挑もうかと思えます。これから後、どれくらい私がこの仕事をしていくかは解りません。でもこれから先は私の下を訪ねて来てくれた人に、もっと私と私の仲間たちの事を理解して貰うように頑張りますよ。

そうじゃないと、私が現役を引退して今の仕事に就いている意味がないですよ。

それに、現役の時よりももっといろいろな人達が私の事を見に来てくれるようにもなりまし

たし、その人達にももっと私と私の仲間達の事を理解して貰う為に努力していきますね。

彼の言葉に俺は頷いた。

そして俺は、さきほど彼が話してくれた夢について、改めて聞いてみた。

夢……ですか？

さっきも少しお話しましたが、私はいつか星空の世界に行ってみたいって本当に思っています。

実際、私の仲間にも星空の世界に行った仲間が数多くいます。

彼らのそんな活躍を聞くと、私もいつか星空の世界に行きたいって本当に思うようになったんです。

だってそうでしょう？

いつも地上から夜空を見上げていたら、その星空の世界に行きたくなるのは当然の事だと思いますよ。

それに私はいろんな星を見てきました。もちろん太陽系内の星だけにとどまらず、もっと遠い星空を見て来たんです。

それをもっと近くで見たいっていうのは、ごく自然な事だと思うんです。

地上では空気の揺らぎとか気象条件によって見づらかったりしますが、宇宙空間に行けばそんな事も無く、好きなだけ星を眺めている事が出来るんですよ。

こんなに素敵な事ってありますか？

いや、私にはこれ以上に素晴らしい事は無いって思えますよ。特に私と同じ仕事をしているものは、一度は夢に見るんじゃないですかね？

星を見る。それを目的に生まれてきたもの達ばかりですよ？あなた達みたいにいろんな生き方を選べる人達なら良いです。しかし私たちは違う。

それしか道を選べなかったんです、だったらその私達が見るべき物の近くに行きたい、そういう事は自然な事なんだと思いませんか？

彼は先ほどとは違った興奮を見せた。

それ程彼は星空の世界に憧れ、その世界に魅せられ、それを愛してやまないという事が俺にもはっきりと伝わってきた。

俺は話し続ける彼の言葉に意識を戻し、彼の言葉の一つ一つに集中した。

でも私だって解っているんです。私にはその能力もないし、ましてや宇宙空間なんかでは私はおそらく何の役にも立てない事なんて。

でも、それは仕方ありませんよね。私はもともと宇宙空間で仕事ができるほどの能力なんてありませんしね。

解ってはいても、いつかは行ってみたいですよ。

あなたも宇宙に行ってみたいと思いませんか？

俺は彼にそう問われ即答した。

「ええ、もちろん」そう声に出して。

やはりあなたもそうなんですね。いえ、恐らくそうなんだろうとは思っていました。

だってそうでもない、私に話しかけてくる人なんてそんなにいませんから。私には無理ですが、もしかしたらあなたになら出来るかもしれませんね。

羨ましいです、でもいいんです。私は宇宙には行けません、でもこんな私でも空を飛んだ事があるんです。

俺はその言葉を聞いて驚くふりをした。

あくまで自然に、彼が俺の驚くふりを見てもそれがふりだなんて事がばれないように。

そうですね、私が空を飛んだ事がある、なんて言うのは嘘だと思うかもしれませんね。

でもこれは本当の事なんです。記憶があるのは一回ですが、恐らく私は二回は空を飛んでいると思います。

一回目は、今はもうない旧天文館の屋上に設置されたドームに入る時です。恐らくこの時も私は空を飛んでいます。しかし私の記憶には無いんですがね。そして二回目は旧天文館のドームから今の天文館に移る時です。

もちろん、宇宙まで行く事はできませんでしたが、それでも大型のクレーンで吊られて少しの間ですが私は空に上がる事が出来たんです。

あの時の感動を私は忘れません。本当に良い経験ができたと思っています。

もちろん少し怖くはありましたけどね。

宇宙には行けませんが、私は空を飛べただけでも充分満足です。おっと、長話が過ぎたようですね。お客さんがたくさんいらしてます。この辺りで失礼します。

今日は私の話を聞いてくれて本当にありがとうございました。

またいらして下さいね。いつでもお待ちしております。

彼はそう言うと、俺との会話を打ち切って仕事に戻った。

しばらく俺は彼の周りをうろつき、その大きな体を眺めて回った。

そして、子供たちが彼の周りで楽しそうな声を上げている様子を見て、俺は彼、GN一六十五型反射式望遠鏡の傍を離れた。

離れる時に彼がこちらに声を掛けてきたように思えて振り返ったが、彼はただ黙ってそこにいた。だが確かに俺には聞こえた。

「ここに連れて来てくれてありがとう」と。

どうやら彼は知っていたようだ。俺が彼をこの場所に連れて来た人間の一人だという事を。

その言葉に俺は彼の方を見て笑顔を返し、そして俺は彼に最後に「こちらこそありがとう」そう言葉を残して彼の下を去った。